

小中学校に設置された病弱・身体虚弱特別支援学級について

児童・生徒の指導上の困難点を中心とした検討

○小畑 文也

(山梨大学総合研究科・障害児教育講座)

KEY WORDS: 小中学校に設置された病弱・身体虚弱特別支援学級 テキストマイニング 児童・生徒の特徴

【目的】

病弱・身体虚弱特別支援学級には、入院中の児童生徒のために病院内に設置された学級や、小・中学校内に設置された学級がある。このうち病院内に設置された学級に関しては、通称「院内学級」として、全国的に設置されており、メディアに登場することもあるので、その認知度は低くはないが、小中学校内に設置された病弱・身体虚弱特別支援学級は、都道府県によって設置がまちまちであること、実態の変動が大きいことなどから、系統的な調査・研究はなされておらず、その存在はバールに包まれていると言っても過言ではない。

しかしながら、昨今その需要は高まり、発表者が居住する山梨県では、10 年前に 9 学級であったものが、本年度は 40 学級を超える設置となっている。文部科学省では、こうした学級の存在は認めながらも、設置基準を含め、学級経営の方途等については、明確な指針やガイドラインを示しておらず、担当となった教員の戸惑いは大きいと思われる。

本研究は、これら小中学校に設置された病弱・身体虚弱特別支援学級について、継続して調査を進めていくものであるが、今回は在籍する児童・生徒の指導上の困難点を明らかにすることを目的とした。

【方法】

1. 対象：山梨県内の小中学校に設置された病弱・身体虚弱特別支援学級に在籍する児童生徒 34 名、及び担任する教員 33 名
2. 調査期間：病弱・身体虚弱特別支援学級の担任は、単年度担当が多いため、学年末の 2020 年度 3 月に調査を実施した。
3. 調査内容：郵送法による質問紙調査とした。児童生徒の指導上の困難点と、それに対する配慮・対応について自由記述により担任に記載してもらった。
4. 倫理的配慮：調査は個人特定が不可能になるよう、無記名で実施した。また、研究全体として相反する利益はない。
5. 分析：自由記述で得られたテキストデータを **USER LOCAL** の **AI テキストマイニングシステム** <https://textmining.userlocal.jp/> のワードクラウド・キーワード・共起キーワード・要約に注目して分析した。なお、分析の途中で同意語（例：子ども 子供）等は適宜統合した。

【結果と考察】

児童生徒の疾患は、呼吸器疾患、染色体異常、慢性心疾患、糖尿病、整形外科系疾患、脳・神経疾患、リウマチ性疾患、皮膚疾患、慢性腎疾患、循環器系疾患、慢性消化器疾患、小児がん、免疫疾患と多岐にわたっており、希少難病に罹患している者もいた。なお、この中では慢性（先天性）心疾患が最も多かった（4例）。

- ## 1. 指導上の困難点について

Fig.1 は全ステートメントの重要度によってワードクラ

ウドを作成したものである。

これから見ると、児童生徒が易疲労性を持っていること、反面、休み時間やプール等の活動的な時間の指導や安全の確保に困難を感じていること、また紙おむつ、パウチ、排泄等介護的な側面に困難を感じていることが分かる。反面、学習や交流等、特別支援学級本来の指導に関しては大きな困難を感じてはいないようであった。

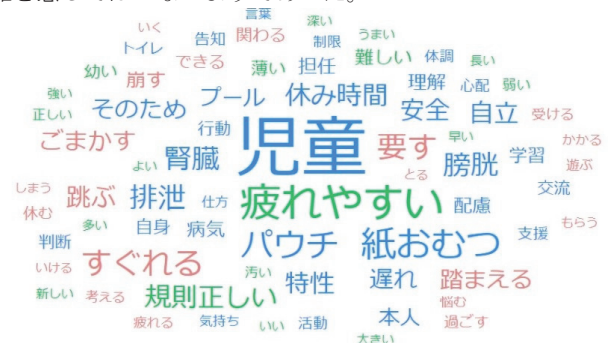


Fig.1 指導上の困難点に関するワードクラウド

共起キーワードは視認性の点から抄録掲載は避け、発表時に提示するが、おむつの交換等介護において教員が苦勞、すること。交流において、子どもの活動を制限するのに困難を感じていること。特に児童の病識が十分ではなく、安全に気を遣う様子が見て取れた。

次にステートメントから要約を抜き出すと以下のように
なった。

Table1 要約

片時も目が離せないで、担当者の気力・体力が心配。
かたくなに自分の気持ちを通そうとすることが多々あった。
定期的な通院・早退等で授業に遅れが生じた。
手洗いなどの清潔の保持に対する意識づけに時間がかかった。
前担任や養護教諭に相談することで解決した。
体調がすぐれない時に体を休ませることが大変であった。
安全を確保しつつ、伸び伸びと活動させる方法。
病弱学級だが、知的障害（軽度）も併せもっている。
障害に対する理解は進んでいるが、ヒヤツとする行動をとることがある。
（同学年と遊びたいが、差が出てきてしまう）

いわゆる院内学級とは異なり、児童生徒は、比較的運動が可能で多く、リファレンスとする子どもも、通常学級の健康児である。これは病識の希薄さに加え、子どもの安全にも関わってくるため、「片時も目が離せない」「体を休ませることが大変」「ヒヤッとする行動をとることがある」などに対し、教員が抑制的に働きかけることが多くならざるをえない傾向が伺われた。今後は「安全を確保しつつ、伸び伸びと活動させる方法」や環境づくりが必要である。

・本研究は科学研究補助費「小中学校に設置された病弱・虚弱学級の実態に関する研究」—19K02909の補助を受けている。

(OBATA Fumiva)